# いもうと水着！

橘 真児

illustration ◎ごまさとし

美少女文庫
FRANCE SHOIN

「あのさ……おれ、来年は卒業していなくなるんだけど」

そう告げると、沙由美はきょとんとした顔でまばたきを繰りかえした。

「――あ、そっか」

ようやく気がついたか、頭からポンと抜けるみたいな声を出す。

(まったく、沙由美ちゃんらしいや)

健太は苦笑した。しかし、彼女が間違ったことを恥じ入るでもなく、眉間(みけん)にシワを寄せて「うーん」と考えこんだのに、一抹の不安を覚える。

(まさか、また突拍子もないことを言いだすんじゃないだろうな)

その予感は見事に的中した。沙由美はニッコリとほほ笑み、さらに力をこめて健太の腕をつかんだ。

「ねえ、健兄ちゃん、なんだったら留年しない？　あともう一年、三年生をやるの。そうすれば、勉強もいっぱいできて志望校にも楽々合格だろうし、来年はわたしと同じクラスになれるかもしれないわ。ね、一石二鳥じゃない」

名案でしょと言いたげな、得意そうな顔つき。どうやら冗談ではなく、本気でそう考えているらしい。

ほとほと呆れかえった健太であったが、それだけ彼女から愛されているということである。悪い気はしない。

「馬鹿なこと言うんじゃないの」
たしなめておでこを小突いたものの、学校に着くまでのあいだ、組んだ腕をほどかずにいてあげた。沙由美はずっと笑顔で、健太の胸もほこほこと温かであった。
だから、仲睦(むつ)まじく歩く兄妹の背後から、じっと見つめる人物がいたことなど、少しも気がつかなかったのだ。

## 2　委員長宣言

入学式は昨日のうちに終わっていた。今日は新任式と始業式があり、いよいよ本格的な新学期開始となる。生徒も先生も新しいメンバーを迎え、校内は華やいだ雰囲気と活気に満ちていた。
「三年三組の担任を務めます、苅辺知花(かるべちか)です。これから一年間、よろしくお願いしますね」
健太たちのクラスを受けもつのは、英語担当の女の先生だ。愛敬のある垂れ気味の目が印象的な彼女のあだなは、名前に倣(なら)って「コロブチカ」。ロシア民謡とは関係ない。文字どおりよく転ぶからだ。廊下にプリントを撒き散らすのが日常茶飯事というドジっ子先生。けれどおっとりした性格だから、少しもめげることはない。

年齢不詳で、見た目は二十代半ばぐらい。しかし、実は三十路ではないのかとも噂されている。まあ、年齢の真偽はともかく、受験生の担任としてはいささか頼りない。ピリピリした空気を和らげてくれるという意味では、いいのかもしれないが。

三年生になって最初のホームルーム。とりあえずの席決めで、健太は窓際になった。しかも前から二番目だ。すぐ前がなぜだか空席で、ますます先生たちの目につきやすい。これでは居眠りなどできないが、もちろんそんなことをしている余裕はない。

（いよいよ高校生活もあと一年だ。がんばらなくっちゃ）

気を引き締めたとき、知花が思いだしたふうに「あ、そうそう」と言い、手のひらをパチンと合わせた。

「新学期早々ですが、転入生を紹介します。志ほ――只見さん、入ってきて」

呼びかけられ、教室前側の引き戸が開く。そこから入ってきた女子生徒を目にするなり、クラス中からどよめきが起こった。けれど注目を浴びた当人が、それをはねかえすようにギロリと睨んできたものだから、すぐにおさまる。

「今年度からこの学校でいっしょに勉強することになった、皆さんの新しいお友達です。名前は、只見志保子さん。みんな、仲良くしてあげてね」

知花の紹介は小学生を相手にするような口ぶりで、転入生の外見からしても、それは違和感たっぷりであった。

なにしろ、黒板の前に立った彼女は、長身でスラリとした体型。前髪をカチューシャでとめて広めのおでこを出し、アンダーリムの眼鏡をかけている。キラリと反射するレンズ越しには、切れ長で吊り気味の目。物怖じすることなく悠然と教室内を見まわしているが、つい視線を逸らしたくなるほどに眼光が鋭い。

足もとはオーバーニーの黒いソックス。長くて細い脚をこれ見よがしに引き立てる。短めのスカートとの狭間に見える太腿が、眩しいほど白い。絶対領域のエロティシズムが、整った理知的な風貌と妙にマッチしていた。

生徒たちのあいだに静かなざわめきがひろがる。志保子が人目を惹く美少女だからだ。ただ、いきなり睨みつけてきたりと、近寄り難い雰囲気がある。大人びた印象で、制服姿もどこかアンバランス。

(転入生……って感じじゃないよな)

普通はもっとオドオドしているのではないかと思うが、彼女はむしろ挑発的な態度。遠慮なく上から目線で、クラスメイトひとりひとりを観察しているようだ。

そして、志保子と目が合った瞬間、健太は背筋がゾクリとするのを覚えた。レンズの奥から強烈なビームが発射され、それに貫かれた気がしたのだ。思わず顔を伏せてしまう。

(仲良くしてあげてねって感じでもないぞ)

変に慣れなれしくしたら、お呼びじゃないわよと罵倒されるのではないだろうか。
「じゃ、ご挨拶して」
知花にうながされ、志保子は一歩前に出た。
「只見志保子です。よろしくお願いします」
素っ気ないほど簡単な挨拶だったが、澄んだ綺麗な声が教室の後ろまでピンと通り、また小さなどよめきがあがった。
「ええと、それじゃ志保ちゃんの席はと――」
知花が教室内を見渡す。だが、『志保ちゃん』というやけに慣れなれしい呼び方に、生徒たちがザワついた。それで気がついたのだろう。
「あ、ごめんなさい。実は志保ちゃ――只見さんは、先生の姪になるの。姉の娘ってわけ。だから、たまに慣れなれしく呼んじゃうことがあるかもしれないけど、そういうことだから許してね」
担任教師の少しも悪びれない弁明に、みんな納得したふうにうなずいた。
(ああ、だからか)
健太も理解した。最初に転入生を紹介したとき、やけに子供扱いしていたのもそのせいなのだ。いくら大きくなっても、姪っ子は姪っ子ということなのだろう。
(待てよ。こんな大きな姪がいるっていうことは、先生のお姉さんは四十歳ぐらいな

んだろうし、そうすると先生も――）
実は三十路（みそじ）という噂が、俄然（がぜん）、信憑性（しんぴょうせい）を帯びてくる。
「じゃ、只見さんの席は、窓際の一番前ね」
言われて、志保子は小さくうなずき、ついと足を進めた。健太の前の席に来て、すぐに座らず彼をじっと見つめる。
「あ、ども」
健太はオドオドと頭をさげた。これではどっちが転入生なのかわからない。
「あなた、名前は？」
小声で問いかけられたのにもビクッとする。
「あ――藤村、健太です……」
「そ」
ただ確認しただけというふうに、志保子はすぐにそっぽを向き、椅子に腰かけた。
（うわ、絡みづらい）
前後の席で、ちょっとは話しかけて交流を持ったほうがいいのかなと思ったが、とてもそういう雰囲気ではない。他のクラスメイトたちも、彼女の後ろ姿に困惑の眼差しを向けている。
「では、三年三組のメンバーが全員そろったところで、まずは学級委員から決めまし

ょうか。誰か委員長に立候補してくれるひとはいるかしら？」
　知花が呼びかけたのに、ほぼ全員が瞬時にうつ向き、先生と視線を合わせないようにした。そんな面倒なことは引き受けたくないと、誰もが思っているのだ。
　学級委員など、表向きはクラスのみんなを引っ張るリーダーと目されているが、要は雑用係。まして受験生なのだから、貴重な時間を奪われる任務など、よほどの物好きかボランティア精神の持ち主でもない限り、自ら引き受けるはずがない。
　案の定、反応はまったくなく、知花は困った顔をした。
「あら、誰もいないの？　じゃあ推薦か、投票で決めるしかないかしら」
　けれど、先生がそう言った直後、
「あたしがやります！」
　凜（りん）とした声が教室内に響き渡る。驚いて顔をあげた生徒たちが目にしたものは、右手をまっすぐに挙げた転入生の姿であった。
「志保ちゃ――只見さんが!?……でも、あなたは転入してきたばかりだし」
　困惑をあらわにする担任教師にはかまわず、志保子はもう決定事項だとばかりに起立して、クラス内を見まわした。
「高校三年生にもなって、ひと任せにしかできない怠惰（たいだ）な人間しか、ここにはいないみたいですから。それなら、あたしがやったほうがずっとマシです」